種田山頭火句集

草木塔抄

鉢の子

1　松はみな枝垂れて南無観世音
2　松風に明け暮れの鐘撞いて
3　ひさしぶりに掃く垣根の花が咲いてゐる

大正十五年四月、解くすべもない惑ひを背負うて、行乞流転の旅に出た。

4　分け入っても分け入っても青い山
5　しとどに濡れてこれは道しるべの石
6　炎天をいただいて乞ひ歩く

放哉居士の作に和して7　鴉啼いてわたしも一人

生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり（修証義）

8　生死の中の雪ふりしきる
9　木の葉散る歩きつめる

昭和二年三年、或は山陽道、或は山陰道、或は四国九州をあてもなくさまよふ。

10　踏みわける萩よすすきよ
11　この旅、果もない旅のつくつくぼうし
12　へうへうとして水を味ふ
13　落ちかかる月を観てゐるに一人
14　ひとりで蚊にくはれてゐる
15　投げだしてまだ陽のある脚
16　山の奥から繭負うて来た
17　笠にとんぼをとまらせてあるく
18　歩きつづける彼岸花咲きつづける
19　まつすぐな道でさみしい
20　だまつて今日の草鞋穿く
21　ほろほろ酔うて木の葉ふる
22　しぐるるや死なないでゐる
23　張りかへた障子のなかの一人
24　水に影ある旅人である
25　雪がふるふる雪見てをれば
26　しぐるるやしぐるる山へ歩み入る
27　食べるだけはいただいた雨となり
28　木の芽草の芽あるきつづける
29　生き残つたからだ掻いてゐる

昭和四年も五年もまた歩きつづけるより外なかつた。あなたこなたと九州地方を流浪したことである。

30 わかれきてつくつくぼうし
31 また見ることもない山が遠ざかる
32 こほろぎに鳴かれてばかり
33 れいろうとして水鳥はつるむ
34 百舌鳥啼いて身の捨てどころなし
35 どうしようもないわたしが歩いてゐる
36 涸れきつた川を渡る
37 ぶらさがつてゐる烏瓜は二つ

大観峰

38 すすきのひかりさえぎるものなし
39 分け入れば水音
40 すべつてころんで山がひつそり

味々居

41 雨の山茶花の散るでもなく
42 しきりに落ちる大きい葉かな
43 けさもよい日の星一つ
44 すつかり枯れて豆となつてゐる
45 つかれた脚へとんぼとまつた
46 枯山飲むほどの水はありて
47 捨てきれない荷物のおもさまへうしろ
48 法衣こんなにやぶれて草の実
49 旅のかきおき書きかへておく
50 岩かげまさしく水が湧いてゐる
51 あの雲がおとした雨にぬれてゐる
52 ここに白髪を剃り落して去る
53 秋となつた雑草にすわる
54 こんなにうまい水があふれてゐる
55 年とれば故郷こひしいつくつくぼうし
56 岩が岩に薊咲かせてゐる
57 それでよろしい落葉を掃く
58 水音といつしよに里へ下りて来た
59 しみじみ食べる飯ばかりの飯である
60 まつたく雲がない笠をぬぎ
61 墓がならんでそこまで波がおしよせて
62 酔うてこほろぎと寝てゐたよ
63 また逢へた山茶花も咲いてゐる
64 雨だれの音も年とつた
65 見すぼらしい影とおもふに木の葉ふる

緑平居 二句

66 逢ひたい、捨炭《ボタ》山が見えだした
67 枝をさしのべてゐる冬木
68 物乞ふ家もなくなり山には雲
69 あるひは乞ふことをやめ山を観てゐる

述懐
70 笠も漏りだしたか
71 霜夜の寝床がどこかにあらう

熊本にて
72 安か安か寒か寒か雪雪

昭和六年、熊本に落ちつくべく努めたけれど、どうしても落ちつけなかつた。またも旅から旅へ旅しつづけるばかりである。

自嘲
73 うしろすがたのしぐれてゆくか
74 鉄鉢の中へも霰
75 いつまで旅することの爪をきる

呼子港
76 朝凪の島を二つおく

大浦天主堂
77 冬雨の石階をのぼるサンタマリヤ
78 ほろりとぬけた歯ではある
79 寒い雲がいそぐ
80 ふるさとは遠くして木の芽
81 よい湯からよい月へ出た
82 はや芽吹く樹で啼いてゐる
83 笠へぽつとり椿だつた
84 しづかな道となりどくだみの芽
85 蕨がもう売られてゐる
86 朝からの騒音へ長い橋かかる
87 ここにおちつき草萌ゆる
88 いただいて足りて一人の箸をおく
89 しぐるる土をふみしめてゆく
90 秋風の石を拾ふ
91 今日の道のたんぽぽ咲いた

其中一人
92 雨ふるふるさとははだしであるく
93 くりやまで月かげの一人で
94 かるかやへかるかやのゆれてゐる
95 うつりきてお彼岸花の花ざかり
96 朝焼雨ふる大根まかう
97 草の実の露の、おちつかうとする
98 ゆふ空から柚子の一つをもらふ
99 茶の花のちるばかりちらしておく
100 いつしか明けてゐる茶の花
101 冬が来てゐる木ぎれ竹ぎれ
102 月が昇つて何を待つでもなく
103 ひとりの火の燃えさかりゆくを
104 お正月の鴉かあかあ
105 落葉の、水仙の芽かよ
106 あれこれ食べるものはあつて風の一日
107 水音しんじつおちつきました

108 茶の木も庵らしくひらいてはちり
109 誰か来さうな空が曇つてゐる枇杷の花
110 落葉ふる奥ふかく御仏を観る
111 雪空の最後の一つをもぐ
112 其中雪ふる一人として火を焚く
113 ぬくい日の、まだ食べるものはある
114 月かげのまんなかをもどる
115 雪へ雪ふるしづけさにをる
116 雪ふる一人一人ゆく
117 落葉あたたかうして藪柑子
118 茶の木にかこまれそこはかとないくらし

或る友に

119 月夜、手土産は米だつたか
120 あるけば蕗のとう
121 椿ひらいて墓がある
122 ひつそりかんとしてぺんぺん草の花ざかり
123 いちりん挿の椿いちりん
124 音は朝から木の実をたべに来た鳥か
125 ぬいてもぬいても草の執着をぬく
126 もう暮れる火の燃え立つなり
127 人が来たよな枇杷の葉のおちるだけ
128 けふは蕗をつみ蕗をたべ
129 何とかしたい草の葉のそよげども
130 すずめをどるやたんぽぽちるや
131 もう明けさうな窓あけて青葉
132 ながい毛がしらが
133 こころすなほに御飯がふいた
134 てふてふうらからおもてへひらひら
135 やつぱり一人がよろしい雑草
136 けふもいちにち誰も来なかつたほうたる
137 すツぱだかへとんぼとまらうとするか
138 かさりこそり音させて鳴かぬ虫が来た

行乞途上

139 松風すずしく人も食べ馬も食べ
140 けふもいちにち風をあるいてきた
141 何が何やらみんな咲いてゐる
142 あるけばきんぽうげすわればきんぽうげ
143 あざみあざやかなあさのあめあがり
144 うつむいて石ころばかり
145 若葉のしづくで笠のしづくで
146 ほうたるこいこいふるさとにきた
147 お寺の竹の子竹になつた
148 松かぜ松かげ寝ころんで
149 明けてくる鎌をとぐ
150 ひとりきいてゐてきつつき
151 かたむいた月のふくろうとして

川棚温泉

152　花いばら、ここの土とならうよ
153　待つてゐるさくらんぼ熟れてゐる
154　山ふところのはだかとなり
155　山路はや萩を咲かせてゐる
156　ここにふたたび花いばら散つてゐる
157　朝の土から拾ふ
158　石をまつり水のわくところ
159　いそいでもどるかなかなかなかな
160　山のいちにち蟻もあるいてゐる
161　雲がいそいでよい月にする
162　朝は涼しい茗荷の子
163　いつも一人で赤とんぼ
164　旅の法衣がかわくまで雑草の風

川棚を去る

165　けふはおわかれの糸瓜がぶらり
166　ぬれるだけぬれてきたきんぽうげ
167　うごいてみのむしだつたよ
168　いちじくの葉かげあるおべんたうを持つてゐる
169　水をへだててをなごやの灯がまたたきだした
170　かすんでかさなつて山がふるさと
171　春風の鉢の子一つ
172　わがままきままな旅の雨にはぬれてゆく

帰庵

173　ひさびさもどれば筍によきによき
174　びつしより濡れて代掻く馬は叱られてばかり
175　はれたりふつたり青田になつた
176　草しげるそこは死人を焼くところ
177　朝露しつとり行きたい方へ行く
178　ほととぎすあすはあの山こえて行かう
179　笠をぬぎしみじみとぬれ
180　家を持たない秋がふかうなるばかり

行乞流転のはかなさであり独善孤調のわびしさである。私はあてもなく果もなくさまよひあるいてゐたが、人つひに孤ならず、欲しがつてゐた寝床はめぐまれた。昭和七年九月二十日、私は故郷のほとりに私の其中庵［#「私の其中庵」傍点あり］を見つけて、そこに移り住むことが出来たのである。

181　曼珠沙華咲いてここがわたしの寝るところ

私は酒が好きであり水もまた好きである。昨日までは酒が水よりも好きであつた。今日は酒が好きな程度に於て水も好きである。明日は水が酒よりも好きになるかも知れない。「鉢の子」には酒のやうな句（その醇不醇は別として）が多かつた。「其中一人」と「行乞途上」には酒のやうな句、水のやうな句がチヤンポンになつてゐる。これからは水のやうな句が多いやうにと念じてゐる。淡如水――それが私の境涯でなければならないから。（昭和八年十月十五日、其中庵にて、山頭火）

山行水行

182 山あれば山を観る
183 雨の日は雨を聴く
184 春夏秋冬
185 あしたもよろし
186 ゆふべもよろし
187 炎天かくすところなく水のながれくる
188 日ざかりのお地蔵さまの顔がにこにこ
189 待つでも待たぬでもない雑草の月あかり
190 風の枯木をひろうてはあるく
191 向日葵や日ざかりの機械休ませてある
192 蚊帳へまともな月かげも誰か来さうな
193 糸瓜ぶらりと地べたへとどいた
194 夕立が洗つていつた茄子をもぐ
195 こほろぎよあすの米だけはある
196 まことお彼岸入の彼岸花
197 手がとどくいちじくのうれざま
198 おもひでは汐みちてくるふるさとのわたし場
199 しようしようとふる水をくむ
200 一つもいで御飯にしよう
201 ふと子のことを百舌鳥が啼く
202 山のあなたへお日さま見おくり御飯にする
203 昼もしづかな蝿が蝿たたきを知つてゐる
204 酔へなくなつたみじめさはこほろぎがなく
205 はだかではだかの子にたたかれてゐる
206 ほんによかつた夕立の水音がそこここ
207 やつと郵便が来てそれから熟柿のおちるだけ
208 散るは柿の葉咲くは茶の花ざかり
209 うれてはおちる実をひろふ
210 人を見送りひとりでかへるぬかるみ
211 月夜、あるだけの米をとぐ
212 空のふかさは落葉しづんでゐる水
213 石があれば草があれば枯れてゐる
214 お月さまが地蔵さまにお寒くなりました
215 水音のたえずしていばらの実
216 うしろから月のかげする水をわたる
217 しぐるる土に播いてゆく

或る若い友

218 落葉を踏んで来て恋人に逢つたなどといふ

219 ぽきりと折れて竹が竹のなか
220 月がうらへまはれば藪かげ
221 とぼしいくらしの屋根の雪とけてしたたる
222 ほいないわかれの暮れやすい月が十日ごろ
223 街は師走の八百屋の玉葱芽をふいた
224 ことしもこんやぎりのみぞれとなつた
225 なんといふ空がなごやかな柚子の二つ三つ
226 ここにかうしてわたしをおいてゐる冬夜
227 焚くだけの枯木はひろへた山が晴れてゐる
228 病めば鶏がそこらまで
229 よびかけられてふりかへつたが落葉林
230 雪へ足跡もがつちりとゆく
231 酒をたべてゐる山は枯れてゐる
232 しんみり雪ふる小鳥の愛情
233 遠山の雪も別れてしまつた人も
234 雪のあかるさが家いつぱいのしづけさ
235 藪柑子もさびしがりやの実がぽつちり
236 枯れてしまうて萩もすすきも濡れてゐる
237 椿のおちる水のながれる
238 寝ざめ雪ふる、さびしがるではないが
239 誰か来さうな雪がちらほら
240 ふくろうはふくろうでわたしはわたしでねむれない
241 汽車のひびきも夜明けらしい楢の葉の鳴る
242 月がうらへまはつても木かげ
243 枯れたすすきに日の照れば誰か来さうな
244 何もかも雑炊としてあたたかく
245 蓑虫もしづくする春が来たぞな

病みほほけて
信濃より帰庵

246 草や木や生きて戻つて茂つてゐる
247 病みて一人の朝がゆふべとなりゆく青葉
248 柿の若葉のかがやく空を死なずにゐる
249 蜂がてふちよが草がなんぼでも咲いて
250 けさは水音も、よいたよりでもありさうな
251 いつもつながれてほえるほかない犬です
252 ほんにしづかな草の生えては咲く
253 生えて伸びて咲いてゐる幸福
254 閉めて一人の障子を虫が来てたたく
255 影もはつきりと若葉
256 ひよいと穴からとかげかよ
257 誰も来てくれない蕗の佃煮を煮る

千人風呂

258 ちんぽこもおそそも湧いてあふれる湯
259 うれしいこともかなしいことも草しげる
260 ひとりひつそり竹の子竹になる
261 山から山がのぞいて梅雨晴れ
262 朝からはだかでとんぼがとまる

263 食べる物はあつて酔ふ物もあつて雑草の雨
264 炎天のはてもなく蟻の行列
265 蜘蛛は網張る私は私を肯定する
266 いつでも死ねる草が咲いたり実つたり
267 日ざかり落ちる葉のいちまい
268 霽れててふてふ二つとなり三つとなり
269 青空したしくしんかんとして
270 ここにわたしがつくつくぼうしがいちにち
271 百合咲けばお地蔵さまにも百合の花
272 草にも風が出てきた豆腐も冷えただろ
273 風がすずしく吹きぬけるので蜂もとんぼも
274 ふるさとの水をのみ水をあび
275 ここを死に場所とし草のしげりにしげり
276 誰にあげよう糸瓜の水をとります
277 お彼岸のお彼岸花をみほとけに
278 彼岸花さくふるさとはお墓のあるばかり
279 秋風の、腹立ててゐるかまきりで
280 おちついて柿もうれてくる
281 重荷を負うてめくらである
282 つくつくぼうしあまりにちかくつくつくぼうし
283 柿の木のむかうから月が柿の木のうへ
284 寝床へ日がさす柿の葉や萱の穂や
285 何か足らないものがある落葉する

郵便屋さん

286 たより持つてきて熟柿たべて行く
287 百舌鳥のさけぶやその葉のちるや

樹明君に

288 うらから来てくれて草の実だらけ
289 ともかくも生かされてはゐる雑草の中

旅から旅へ

290 わかれてきた道がまつすぐ
291 月も水底に旅空がある
292 柳があつて柳屋といふ涼しい風
293 みんなたつしやでかぼちやの花も
294 夕立晴れるより山蟹の出てきてあそぶ
295 そこから青田のよい湯かげん
296 昼寝さめてどちらを見ても山
297 旅はいつしか秋めく山に霧のかかるさへ
298 よい宿でどちらも山で前は酒屋で
299 すわれば風がある秋の雑草
300 ここで寝るとする草の実のこぼれる
301 萩がすすきがけふのみち

白船居

302 うらに木が四五本あればつくつくぼうし
303 道がなくなり落葉しようとしてゐる
304 木の葉ふるふる鉢の子へも

305　柳ちるそこから乞ひはじめる
306　よい道がよい建物へ、焼場です

長門峡

307　いま写します紅葉が散ります
308　あるけば草の実すわれば草の実
309　春が来た水音の行けるところまで
310　梅もどき赤くて機嫌のよい目白頬白
311　春寒のをなごやのをなごが一銭持つて出てくれた
312　さて、どちらへ行かう風がふく
313　この道しかない春の雪ふる
314　けふはここまでの草鞋をぬぐ

石鴨荘

315　草山のしたしさは鶯も啼く
316　いつとなくさくらが咲いて逢うてはわかれる

橋畔亭

317　先生のあのころのことも楓の芽
318　樹が倒れてゐる腰をかける

津島同人に

319　おわかれの水鳥がういたりしづんだり
320　燕とびかふ旅から旅へ草鞋を穿く

名古屋同人に

321　もう逢へますまい木の芽のくもり
322　乞ひあるく水音のどこまでも

木曾路

323　飲みたい水が音たててゐた
324　山ふかく蕗のとうなら咲いてゐる
325　山しづかなれば笠をぬぐ

三句

飯田にて病む二句

326　まこと山国の、山ばかりなる月の
327　あすはかへらうさくらちるちつてくる

山行水行［#「山行水行」の四字傍点］はサンコウスイコウとも或はまたサンギョウスイギョウとも読まれてかまはない。私にあつては、行くことが修することであり、歩くことが行ずることに外ならないからである。

昨年の八月から今年の十月までの間に吐き捨てた句数は二千に近いであらう。

その中から拾ひあげたのが三百句あまり、それをさらに選り分けて　纏めたのが以上の百四十一句である。うたふもののよろこびは力いつぱいに自分の真実をうたふことである。この意味に於て、私は恥ぢることなしにそのよろこびをよろこびたいと思ふ。

328　あるけばきんぽうげすわればきんぽうげ
329　あるけば草の実すわれば草の実

この二句は同型同曲である。どちらも行乞途上に於ける私の真実をうたつた作であるが、現在の私としては前句を捨てて後句を残すことにする。

私はやうやく『存在の世界』にかへつて来て帰家穏坐とでもいひたいこころちがする。私

は長い間さまようてゐた。からだがさまようてゐたばかりでなく、こころもさまようてゐた。在るべきものに苦しみ、在らずにはゐないものに悩まされてゐた。そしてやうやくにして、在るものにおちつくことができた。そこに私自身を見出したのである。在るべきものも在らずにはゐないものもすべてが在るものの中に蔵されてゐる。在るものを知るときすべてを知るのである。私は在るべきものを捨てようとするのではない、在らずにはゐないものから逃れようとするのではない。『存在の世界』を再認識して再出発したい私の心がまへである。

うたふものの第一義はうたふことそのことでなければならない。私は詩として私自身を表現しなければならない。それこそ私のつとめであり同時に私のねがひである。

（昭和九年の秋、其中庵にて、山頭火）

雑草風景

330 柿が赤くて住めば住まれる家の木として
331 みごもってよろめいてこほろぎかよ
332 日かげいつか月かげとなり木のかげ
333 残された二つ三つが熟柿となる雲のゆきき
334 みんなではたらく刈田ひろびろ
335 誰も来ないとうがらし赤うなる
336 病めば梅ぼしのあかさ
337 なんぼう考へてもおんなじことの落葉ふみあるく
338 落葉ふかく水汲めば水の澄みやう

病中　二句

339 寝たり起きたり落葉する
340 ほつかり覚めてまうへの月を感じてゐる
341 月のあかるい水汲んでおく

白船老に

342 あなたを待つてゐる火のよう燃える
343 ちよいと茶店があつて空瓶に活けた菊

多賀治第二世の出生を祝して

344 お日様のぞくとすやすや寝顔
345 悔いるこころに日が照り小鳥来て啼くか
346 落葉ふんで豆腐やさんが来たので豆腐を
347 枯れゆく草のうつくしさにすわる
348 冬がまた来てまた歯がぬけることも
349 噛みしめる味も抜けさうな歯で
350 竹のよろしさは朝風のしづくしつつ
351 霽れて元日の水がたたへていつぱい
352 舫ひてここに正月の舳をならべ
353 枯木に鴉が、お正月もすみました
354 どこからともなく散つてくる木の葉の感傷
355 しぐれつつうつくしい草が身のまはり
356 ひつそり暮らせばみそさざい
357 ぶらりとさがつて雪ふる蓑虫
358 雪もよひ雪にならない工場地帯のけむり
359 あたたかなれば木かげ人かげ
360 住みなれて藪椿いつまでも咲き

361　あるがまま雑草として芽をふく
362　ぬくうてあるけば椿ぽたぽた
363　風がほどよく春めいた藪と藪
364　ほろにがさもふるさとの蕗のとう
365　ゆらいで梢もふくらんできたやうな
366　山から白い花を机に
367　ある日は人のこひしさも木の芽草の芽
368　人声のちかづいてくる木の芽あかるく
369　伸びるより咲いてゐる
370　草のそよげば何となく人を待つ
371　ひとりたがやせばうたふなり
372　花ぐもりの窓から煙突一本
373　ひつそり咲いて散ります
374　枇杷が枯れて枇杷が生えてひとりぐらし
375　照れば鳴いて曇れば鳴いて山羊がいつぴき
376　空へ若竹のなやみなし
377　身のまはりは草だらけみんな咲いてる
378　ころり寝ころべば青空
379　何を求める風の中ゆく
380　草を咲かせてそしててふちよをあそばせて
381　青葉の奥へなほ径があつて墓
382　それもよからう草が咲いてゐる
383　月がいつしかあかるくなればきりぎりす
384　木かげは風がある旅人どうし
385　日の光ちよろちよろとかげとかげ
386　月のあかるさがうらもおもてもきりぎりす

樹明君に

387　あんたが来てくれさうなころの風鈴
388　炎天の稗をぬく
389　てふてふもつれつつかげひなた
390　もう枯れる草の葉の雨となり
391　くづれる家のひそかにくづれるひぐらし

病中　五句

392　死んでしまへば雑草雨ふる
393　死をまへに涼しい風
394　風鈴の鳴るさへ死のしのびよる
395　おもひおくことはないゆふべの芋の葉ひらひら
396　傷が癒えゆく秋めいた風となつて吹く
397　秋風の水音の石をみがく
398　萩が径へまでたまたま人の来る
399　月へ萱の穂の伸びやう
400　旅はゆふかげの電信棒のつくつくぼうし
401　つきあたれば秋めく海でたたへてゐる

題して『雑草風景』といふ、それは其中庵風景であり、そしてまた山頭火風景である
風景は風光とならなければならない。音が声となり、かたちがすがたとなり、にほひが

かをりとなり、色が光となるやうに。私は雑草的存在に過ぎないけれどそれで満ち足りてゐる。雑草は雑草として、生え伸び咲き実り、そして枯れてしまへばそれでよろしいのである。或る時は澄み或る時は濁る。――澄んだり濁つたりする私であるが、澄んでも濁つても、私にあつては一句一句の身心脱落であることに間違ひはない。　此の一年間に於て私は十年老いたことを感じる(十年間に一年しか老いなかつたこともあつたやうに)。そして老来ますます惑ひの多いことを感じないではゐられない。かへりみて心の脆弱、句の貧困を恥ぢ入るばかりである。(昭和十年十二月二十日、遠い旅路をたどりつつ、山頭火)

柿の葉

昭和十年十二月六日、庵中独坐に堪へかねて旅立つ

402　水に雲かげもおちつかせないものがある

生野島無坪居

403　あたたかく草の枯れてゐるなり

404　旅は笹山の笹のそよぐのも

門司埠頭

405　春潮のテープちぎれてなほも手をふり

406　ばいかる丸にて

407　ふるさとはあの山なみの雪のかがやく

宝塚へ

408　春の雪ふる女はまことうつくしい

409　あてもない旅の袂草こんなにたまり

410　たたずめば風わたる空のとほくとほく

宇治平等院

411　雲のゆききも栄華のあとの水ひかる

三句

412　春風の扉ひらけば南無阿弥陀仏

413　うららかな鐘を撞かうよ

伊勢神宮

414　たふとさはましろなる鶏

魚眠洞君と共に

415　けふはここに来て枯葦いちめん

416　麦の穂のおもひでがないでもない

浜名湖

417　春の海のどこからともなく漕いでくる

418　鎌倉はよい松の木の月が出た

419　伊豆はあたたかく野宿によろしい波音も

420　また一枚ぬぎすてる旅から旅

421　ほつと月がある東京に来てゐる

422　花が葉になる東京よさようなら

甲信国境

423　行き暮れてなんとここらの水のうまさは

424　のんびり尿する草の芽だらけ

信濃路

425　あるけばかつこういそげばかつこう

426　からまつ落葉まどろめばふるさとの夢

江畔老に　427
浅間をまともにおべんたうは草の上にて

碓氷山中にて路を失ふ　428
山のふかさはみな芽吹く

国上山　429
青葉わけゆく良寛さまも行かしたろ

日本海岸　430
こころむなしくあらなみのよせてはかへし
431
砂丘にうづくまりけふも佐渡は見えない
432
荒海へ脚投げだして旅のあとさき
433
水底の雲もみちのくの空のさみだれ
434
あうたりわかれたりさみだるる
435
水音とほくちかくおのれをあゆます

毛越寺　436
草のしげるや礎石ところどころのたまり水

平泉　437
ここまでを来し水飲んで去る

永平寺　438
水音のたえずして御仏とあり

三句　439
てふてふひらひらいらかをこえた
440
法堂《ハツタウ》あけはなつ明けはなれてゐる

大阪道頓堀　441
みんなかへる家はあるゆふべのゆきき
442
更けると涼しい月がビルの間から
443
今日の足音のいちはやく橋をわたりくる

七月二十二日帰庵　444
ふたたびここに草もしげるまま
445
わたしひとりの音させてゐる

自責　446
酔ざめの風のかなしく吹きぬける
447
鴉啼いたとて誰も来てはくれない
448
山羊はかなしげに草は青く
449
つくつくぼうし鳴いてつくつくぼうし
450
降れば水音がある草の茂りやう

庵中独坐　451
こころおちつけば水の音
452
ひらひら蝶はうたへない
453
ぬれててふてふどこへゆく
454
大いに晴れわたり大根二葉
455
何おもふともなく柿の葉のおちることしきり
456
柚子の香のほのばの遠い山なみ
457
にぎやかに柿をもいでゐる

千人風呂　458
はだかで話がはづみます
459
からむものがない蔓草の枯れてゐる
460
米とぐところみぞそばのいつとなく咲いて
461
墓場あたたかうしててふてふ

462 山ふところの、ことしもここにりんだうの花
463 けさは涼しいお粥をいただく

結婚したといふ子に

464 をとこべしをみなへしと咲きそろふべし
465 わかれて遠い人を、佃煮を、煮る
466 鎌をとぐ夕焼おだやかな
467 いつまで生きる曼珠沙華咲きだした
468 籔にいちにちの風がをさまると三日月
469 わたしと生れたことが秋ふかうなるわたし
470 歩くほかない草の実つけてもどるほかない
471 あたたかい白い飯が在る
472 ふつと影がかすめていつた風
473 風の明暗をたどる
474 立ちどまると水音のする方へ道
475 ほんのり咲いて水にうつり
476 草の咲けるを露のこぼるるを
477 吹きぬける秋風の吹きぬけるままに
478 やつと咲いて白い花だつた
479 落葉の濡れてかがやくを柿の落葉
480 悔いるこころの曼珠沙華燃ゆる
481 ふるさとの土の底から鉦たたき
482 月からひらり柿の葉
483 何を待つ日に日に落葉ふかうなる
484 涸れてくる水の澄みやう
485 草の枯るるにみそつちよ来たか
486 澄太おもへば柿の葉のおちるおちる
487 風は何よりさみしいとおもふすすきの穂
488 産んだまま死んでゐるかよかまきりよ
489 けふは凩のはがき一枚
490 草のうつくしさはしぐれつつしめやかな
491 洗へば大根いよいよ白し
492 しぐるる土をうちおこしては播く

自嘲

493 影もぼそぼそ夜ふけのわたしがたべてゐる
494 冬木の月あかり寝るとする
495 ひよいと芋が落ちてゐたので芋粥にする
496 しぐれしたしうお墓を洗つていつた
497 秋ふかい水をもらうてもどる
498 ひとりの火をつくる
499 生きてしづかな寒鮒もろた
500 草はうつくしい枯れざま
501 藁塚藁塚とあたたかし

樹明君に

502 落葉ふみくるその足音は知つてゐる
503 やつぱり一人はさみしい枯草
504 落葉してさらにしたしくおとなりの灯の

505　風の中からかあかあ鴉
506　葉の落ちて落ちる葉はない太陽
507　何事もない枯木雪ふる
508　ことしも暮れる火吹竹ふく
509　お正月が来るバケツは買へて水がいつぱい

昭和十二年元旦

510　今日から新らしいカレンダーの日の丸

自画像

511　ぼろ着て着ぶくれておめでたい顔で
512　あつまつてお正月の焚火してゐる
513　雪ふる食べるものはあつて雪ふる
514　みぞるる朝のよう燃える木に木をかさね
515　しみじみ生かされてゐることがほころび縫ふとき
516　いつも出てくる蕗のとう出てきてゐる

緑平老に

517　かうして生きてはゐる木の芽や草の芽や
518　雪ふれば酒買へば酒もあがつた
519　ひらくよりしづくする椿まつかな
520　てふてふうらうら天へ昇るか

自戒

521　一つあれば事足る鍋の米をとぐ

柿の葉はうつくしい、若葉も青葉も――ことに落葉はうつくしい。濡れてかがやく柿の落葉に見入るとき、私は造化の妙にうたれるのである。

522　あるけば草の実すわれば草の実
523　あるけばかつこういそげばかつこう

そのどちらかを捨つべきであらうが、私としてはいづれにも捨てがたいものがある。昨年東北地方を旅して、郭公が多いのに驚きつつ心ゆくまでその声を聴いた。信濃路では、生れて始めてその姿さへ観たのであつた。

524　やつぱり一人がよろしい雑草
525　やつぱり一人はさみしい枯草

自己陶酔の感傷味を私自身もあきたらなく感じるけれど、個人句集では許されないでもあるまいと考へて敢て採録した。かうした私の心境は解つてもらへると信じてゐる。
（昭和丁丑の夏、其中庵にて　山頭火）

銃後

526　天われを殺さずして詩を作らしむ
527　われ生きて詩を作らむ
528　われみづからのまことなる詩を

街頭所見

529　日ざかりの千人針の一針づつ
530　月のあかるさはどこを爆撃してゐることか
531　秋もいよいよふかうなる日の丸へんぽん

532 ふたたびは踏むまい土を踏みしめて征く
533 しぐれて雲のちぎれゆく支那をおもふ

戦死者の家

534 ひっそりとして八ツ手花咲く

遺骨を迎ふ

535 しぐれつつしづかにも六百五十柱
536 もくもくとしてしぐるる白い函をまへに
537 山裾あたたかなここにうづめます
538 凩の日の丸二つ二人も出してゐる
539 冬ぼたんほつと勇ましいたよりがあつた
540 雪へ雪ふる戦ひはこれからだといふ
541 勝たねばならない大地いつせいに芽吹かうとする

遺骨を迎へて

542 いさましくもかなしくも白い函
543 街はおまつりお骨となつて帰られたか

遺骨を抱いて帰郷する父親

544 ぽろぽろしたたる汗がましろな函に
545 お骨声なく水のうへをゆく
546 その一片はふるさとの土となる秋
547 みんな出て征く山の青さのいよいよ青く
548 馬も召されておぢいさんおばあさん

ほまれの家

549 音は並んで日の丸はたたく

歓送

550 これが最後の日本の御飯を食べてゐる、汗
551 ぢつと瞳が瞳に喰ひ入る瞳
552 案山子もがつちり日の丸ふつてゐる

戦傷兵士

553 足は手は支那に残してふたたび日本に

孤寒

554 だまつてあそぶ鳥の一羽が花のなか
555 春風の蓑虫ひよいとのぞいた
556 ひよいとのぞいて蓑虫は鳴かない
557 もらうてもどるあたたかな水のこぼるるを
558 とんからとんから何織るうららか
559 ひなたはたのしく啼く鳥も蹄かぬ鳥も
560 身のまはりはほしいままなる草の咲く
561 草の青さよはだしでもどる
562 草は咲くがままのてふてふ
563 藪から鍋へ筍いつぽん
564 ならんで竹の子竹になりつつ
565 窓にしたしく竹の子竹になる明け暮れ
566 風の中おのれを責めつつ歩く
567 われをしみじみ風が出て来て考へさせる
568 雷をまぢかに覚めてかしこまる
569 がちやがちやがちやがちや鳴くよりほかない

570 誰を待つとてゆふべは萩のしきりにこぼれ
571 声はまさしく月夜はたらく人人だ
572 雨ふればふるほどに石蕗の花
573 播きをへるとよい雨になる山のいろ
574 そこはかとなくそこら木の葉のちるやうに
575 ゆふべなごやかな親蜘蛛子蜘蛛
576 しんじつおちつけない草のかれがれ
577 しぐるるやあるだけの御飯よう炊けた
578 焼場水たまり雲をうつして寒く

死線四句

579 死はひややかな空とほく雲のゆく
580 死をひしと唐辛まつかな
581 死のしづけさは晴れて葉のない木
582 そこに月を死のまへにおく
583 いつとなく机に塵が冬めく
584 草の実が袖にも裾にもあたたかな
585 枯すすき枯れつくしたる雪のふりつもる
586 水に放つや寒鮒みんな泳いでゐる
587 一つあると蕗のとう二つ三つ
588 蕗のとうことしもここに蕗のとう
589 わかれてからのまいにち雪ふる

母の四十七回忌

590 うどん供へて、母よ、わたくしもいただきまする
591 其中一人いつも一人の草萌ゆる
592 枯枝ぽきぽきおもふことなく
593 つるりとむげて葱の白さよ
594 鶺また一羽となればしきり啼く
595 なんとなくあるいて墓と墓との間
596 おのれにこもる藪椿咲いては落ち
597 春が来たいちはやく虫がやつて来た
598 啼いて二三羽春の鴉で
599 咳がやまない背中をたたく手がない
600 窓あけて窓いつぱいの春
601 しづけさ、竹の子みんな竹になつた
602 ひとり住めばあをあをとして草
603 朝焼夕焼食べるものがない

自嘲

604 初孫がうまれたさうな風鈴の鳴る
605 雨を受けて桶いつぱいの美しい水
606 飛んでいつぴき赤蛙
607 げんのしようこのおのれひそかな花と咲く
608 また一日がをはるとしてすこし夕焼けて

更に改作（昭和十五年二月）

609 草にすわり飯ばかりの飯をしみじみ

行乞途上（改作追加）　610　草にすわり飯ばかりの飯
旅心　611　葦の穂風の行きたい方へ行く
612　身にちかく水のながれくる
613　どこからともなく雲が出て来て秋の雲
614　飯のうまさが青い青い空
615　ごろりと草に、ふんどしかわいた
616　をなごやは夜がまだ明けない葉柳並木
617　秋風、行きたい方へ行けるところまで
618　ビルとビルとのすきまから見えて山の青さよ
619　朝の雨の石をしめすほど
行旅病死者　620　霜しろくころりと死んでゐる
老ルンペンと共に　621　草をしいておべんたう分けて食べて右左
622　朝のひかりへ蒔いておいて旅立つ
623　ちよいと渡してもらふ早春のさざなみ
624　なんとうまさうなものばかりがショウキンドウ
宇平居　625　石に水を、春の夜にする
福沢先生旧邸　626　その土蔵はそのままに青木の実
627　ひつそり蕗のとうここで休まう
628　人に逢はなくなりてより山のてふてふ
629　ふつとふるさとのことが山椒の芽
630　どこでも死ねるからだで春風
631　たたへて春の水としあふれる
632　水をへだててをとことをなごと話が尽きない
633　旅人わたしもしばしいつしよに貝掘らう
634　うらうら蝶は死んでゐる
635　さくらまんかいにして刑務所
病院に多々桜君を見舞ふ　636　投げ挿しは白桃の蕾とくとくひらけ
多々桜君の霊前にて　637　桃が実となり君すでに亡し
638　うららかにボタ山がボタ山に
湯田名所　639　大橋小橋ほうたるほたる
640　このみちをたどるほかない草のふかくも
妹の家　641　たまたまたづね来てその泰山木が咲いてゐて
642　泊ることにしてふるさとの葱坊主
643　ふるさとはちしやもみがうまいふるさとにゐる
644　うまれた家はあとかたもないほうたる
温柔郷裏の井子居　645　きぬぎぬの金魚が死んで浮いてゐる

華山山麓の友に　646　やうやくたづねあててかなかな

孤寒［＃「孤寒」の二文字に傍点］といふ語は私としても好ましいとは思はないが、私はその語が表現する限界を彷徨してゐる。私は早くさういふ句境から抜け出したい。この関頭を透過しなければ、私の句作は無礙自在であり得ない。

（孤高［＃「孤高」の二文字に傍点］といふやうな言葉は多くの場合に於て夜郎自大のシノニムに過ぎない。）

私の祖母はずゐぶん長生したが、長生したがためにかへつて没落転々の憂目を見た。祖母はいつも『業《ごふ》やれ業やれ』と呟いてゐた。私もこのごろになつて、句作するとき（恥かしいことには酒を飲むときも同様に）『業《ごふ》だな業だな』と考へるやうになつた。祖母の業やれ［＃「業やれ」に傍点］は悲しいあきらめであつたが、

私の業だな［＃「業だな」に傍点］は寂しい白覚である。私はその業を甘受してゐる。むしろその業を悦楽してゐる。

647　凩の日の丸二つ二人も出してゐる
648　音は並んで日の丸はたたく

二句とも同一の事変現象をうたつた作であるが（季は違つてゐたが）、前句は眼から心への、後句は耳から心への印象表現として、どちらも残しておきたい。

649　しみじみ食べる飯ばかりの飯である
650　草にすわり飯ばかりの飯

やうやくにして改作することが出来た。両句は十年あまりの歳月を隔ててゐる。その間の生活過程を顧みると、私には感慨深いものがある。（昭和十三年十月其中庵にて、山頭火）

鴉

651　水のうまきを蛙鳴く
652　寝床まで月を入れ寝るとする
653　生えて墓揚の、咲いてうつくしや
654　むしあつく生きものが生きものの中に
655　山からしたたる水である
656　まひまひしづか湧いてあふるる水なれば
657　かたすみの三ツ葉の花なり

半搗米を常食とし

658　米の黒さもたのもしく洗ふ
659　へそが汗ためてゐる
660　降りさうなおとなりも大根蒔いてゐる
661　むすめと母と蓮の花さげてくる
662　雷とどろくやふくいくとして花のましろく
663　風のなか米もらひに行く
664　日が山に、山から月が、柿の実たわわ
665　萩が咲いてなるほどそこにかまきりがをる
666　鳴いてきりぎりす生きてはゐる
667　ここを墓場とし曼珠沙華燃ゆる
668　身のまはりは日に日に好きな草が咲く

貧農生活
二句

669 働らいても働らいてもすすきツ穂
670 刈るより掘るより播いてゐる
671 つゆけくも露草の花の
672 空襲警報るゐるゐとして柿赤し
673 防空管制下よい子うまれて男の子

身辺整理

674 焼いてしまへばこれだけの灰を風吹く

老遍路

675 死ねない手がふる鈴をふる
676 とほくちかくどこかのおくで鳴いてゐる

わが其中庵も

677 壁がくづれてそこから蔓草
678 それは死の前のてふてふの舞
679 月は見えない月あかりの水まんまん
680 十一月、湯田の風来居に移る
681 一羽来て啼かない鳥である
682 秋もをはりの蝿となりはひあるく
683 水のゆふべのすこし波立つ
684 燃えに燃ゆる火なりうつくしく

再会

685 握りしめる手に手のあかぎれ
686 囚人の墓としひそかに草萌えて

となりの夫婦

687 やつと世帯が持てて新らしいバケツ

日支事変

688 木の芽や草の芽やこれからである
689 赤字つづきのどうやらかうやら蕗のとう
690 机上一りんおもむろにひらく

三月、東へ旅立つ

691 旅もいつしかおたまじやくしが泳いでゐる
692 春の山からころころ石ころ
693 啼いて鴉の、飛んで鴉の、おちつくところがない
694 風は海から吹きぬける葱坊主

伊良湖岬

695 はるばるたづね来て岩鼻一人

渥美半島

696 まがると風が海ちかい豌豆畑

鳳来寺拝登

697 お山しんしんしづくする真実不虚

青蓋句屋

698 花ぐもりピアノのおけいこがはじまりました

浜名街道

699 水のまんなかの道がまつすぐ

秋葉山中

700 石に腰を、墓であつたか

701　水たたへたればおよぐ蟇

天龍川をさかのぼる　702　水音けふもひとり旅ゆく
703　山のしづけさは白い花

若水君と共に高遠城阯へ、緑平老に一句
704　なるほど信濃の月が出てゐる

月蝕　705　旅の月夜のだんだん虧げゆくを

伊那町にて　706　この水あの水の天龍となる水音

権兵衛峠へ　707　ながれがここでおちあふ音の山ざくら

鳥居峠　708　このみちいくねんの大栃芽吹く

木曾の宿　709　おちつけないふとんおもたく寝る

帰居　710　しみじみしづかな机の塵
711　朝の土をもくもくもたげてもぐらもち

大旱　712　涸れて涸れきつて石ころごろごろ

雨乞　713　燃ゆる火の、雨ふらしめと燃えさかる
714　どこにも水がない枯田汗してはたらく
715　まいにちはだかでてふちよやとんばや
716　炎天のレールまつすぐ
717　もらうてもどる水がこぼれるすずしくも
718　鉦たたきよ鉦をたたいてどこにゐる
719　月のあかるさ旅のめをとのさざめごと
720　鳥とほくとほく雲に入るゆくへ見おくる
721　けふの暑さはたばこやにたばこがない
722　月は澄みわたり刑務所のまうへ

九月、四国巡礼の旅へ　723　鴉とんでゆく水をわたらう

三年ぶりに句稿（昭和十三年七月―十四年九月）を整理して七十二句ほど拾ひあげた。所詮は自分を知ることである。私は私の愚を守らう。

（昭和十五年二月、御幸山麓一草庵にて、山頭火）

この種田山頭火の俳句集『草木塔抄』は、青空文庫 http://aozora.gr.jp/よりダウンロードしたテキストデータを、オジャラが習字の手本にする目的で作成したため、通し番号がついております。最近、俳句を始めたいという方が増え、この程度の手本でも、ご参考になればと考えてＰＤＦ配信を開始しました。自由律俳句に親しみたい方は、ご自由にご利用下さい。
間違い、訂正箇所など、情報をお持ちの方は、rica@ojara.netまで、お知らせ下さい。　おじゃらりか